

古代東国の仏教と一切経

牧 伸 行

はじめに

古代の正史である六国史の中で、単純に一切経をキーワードとして検索すると全部で二二例が検出できる。詳細は後述するが、内訳としては『日本書紀』四例、『続日本紀』一二例、『日本後紀』四例⁽¹⁾、『続日本後紀』四例、『日本文徳天皇実録』三例、『日本三代実録』五例である。古代における一切経の書写事業が国家によって催されていることが多いのに比べると、この数は決して多いとはいえないだろう。

この二二例の中で、特に注目したい記事としては、『続日本後紀』及び『日本文徳天皇実録』に収録されている東国に対する一切経の書写命令に関する記事である。その書写命令は都合四度にも及ぶことが史料より知られ、それぞれが関連する可否

かは別にしても、何故東国に対して書写命令が出されるに至ったのかということに関しては、その理由が明記されていないために不明とするしかない。しかし、わざわざ東国の数ヶ国に対して命令が出されているのであるから、何らかの事情があったのであろうことは想像に難くない。

ただし、このこの東国に対する一切経の書写を命じたことについては、書写に際しての底本の問題等については述べられてはいるが、書写事業そのものに対しては管見に触れた限り「宗教的文化的な関心を高揚する上で、画期的な事業であった」という評価が堀池春峰氏によって与えられている⁽²⁾だけである。しかし、この評価は東国が当時の後進地域であったという前提の下に与えられたものであり、果たして当時の東国の実情に合致するものであるのかどうかという点については再考すべき問題

を含んでいるものと考えられる。

また、書写を命じた動機についても堀池氏によれば「延暦七・二十年度の蝦夷征討の後にもたらされた兵站基地としての関東に対する政治的工作の一環的施策¹⁾」であつたという推測を行つておられる。ただし、弘仁二年（八一）に文室綿麻呂による征夷が行われて以後は大規模な征夷活動は行われていないといふことを考慮するならば、この時期の東国と蝦夷経営とを結びつけることについては少々無理があるようにも考えられる。

さらに、奈良時代においては一切経の書写事業自体は国家事業として、令外官である写経所において行われていたものを、東国という地域に限定して命じているということは果たして如何なる意味を持つものかという点も考慮した上で、東国における一切経写経事業に関して考察を行いたい。

一、六国史に見える一切経記事

1 『日本書紀』と『続日本紀』

東国での一切経書写に関して考察を加える前に、最初に述べた六国史にみえる一切経関連記事について、少々煩雑ではあるが、それぞれの記事についてみておきたい。

最初に一切経という言葉で検出できるのは、A『日本書紀』白雉二年（六五一）十二月晦日条である。

冬十二月晦。於^ニ味経宮^一請^ニ二千一百餘僧尼^一。使^レ讀^ニ一切経^一。是夕。燃^ニ二千七百餘燈^一於^ニ朝廷内^一。使^レ讀^ニ安宅土側等經^一。於是。天皇從^ニ於大郡^一遷居^ニ新宮^一。號曰^ニ難波長柄豐碓宮^一。

これは味経宮で僧に一切経を読ませたという記事であるが、ここにみえる一切経は果たして入蔵録に基づく一切経という意味であるかどうかは不明である。この時期以前より、隋・唐、あるいは朝鮮半島の諸国との交渉は行われており、大陸より經典類が将来されていたであろうことは認められる。そして、入蔵録の将来されていた可能性も否定することはできない。

ところで、この時点までに作成されていた入蔵録で主だったものを挙げると、

- ① 前秦・道安『綜理衆経目錄』（『道安錄』）一卷、六三九部 八八六七卷
- ② 梁・僧祐『出三蔵記集』（『僧祐錄』）一五卷、一五七二部 三三六五卷
- ③ 隋・法経等『衆経目錄』（『法経錄』）七卷、二二五七部五 三一〇卷
- ④ 隋・費長房『歷代三寶記』（『長房錄』）一五卷、一〇七六

部三二九二卷

⑤隋・彦琮『隋衆經目錄』（『彦琮錄』『仁壽錄』）五卷、二一

〇九部五〇五九卷

これらのうちの何れかが将来されていた可能性はあるが、巻数を見る限りは「二千七百余巻」と合致するものが存在しない。むしろ、何れの入蔵録に比べてその数が少ないということを考慮するならば、入蔵録に収録されている經典が全て将来しているとは限らず、現存するものを集めただけと考えた方が自然であろう。そして、この時点で一切經への関心が持たれたことについては、新羅への対抗を契機として、汎東アジアの正当性と唐皇帝への友誼を象徴するものとして、思想的に根拠づけようとしたものであると指摘されている⁽⁵⁾。

白雉二年（六五二）の記事は単独で史料に表れ、他に関連する記事を持たないが、その後天武朝に至って、一切經に関する記事が三例ある。

B 天武天皇二年（六七三）三月是月条

是月。聚書生。始寫一切經於川原寺。

C 天武天皇四年（六七五）十月癸酉（二日）条

冬十月辛未朔癸酉。遣使於四方。覓一切經。

D 天武天皇六年（六七七）八月乙巳（十五日）条

八月辛卯朔乙巳。大設齋於飛鳥寺。以讀一切經。使天皇

御寺南門一而禮三寶。是時。詔親王。諸王及羣卿。每

人賜出家一人。其出家者不問男女長幼。皆隨願度之。

因以會于大齋。

これらの記事については一連のものと考えられ、先ず天武二年（六七三）三月に川原寺に写經生が集められ、一切經の書写が開始されている（B）。そして、經典類の不足が生じたために諸国へと使者が派遣されて、一切經を集めるということが行われ（C）、天武六年（六七七）に至って一切經の写經事業が完成し、飛鳥寺において供養が行われている（D）。この場合、白雉の時とは異なり、何れかの入蔵録を基にしたの写經であったと考えられ、そのために使者が諸国へと派遣されたのである。つまり、漠然と存在する經典を書写し、一切經としたのではなく、基準があつてその不足を求めるために使者が派遣されたものと考えられるのである。

次に、『続日本紀』が対象とする奈良時代であるが、奈良時代における一切經の写經事業は、一般的には令外官である写經機構が国家により設置されて、写經機構によつて多くの写經が行われていた。代表的な一切經としては、光明皇后の発願による天平八年（七三六）五月一日の識語を持ついわゆる「五月一日經」を初めとする一切經の書写事業が、国家の手によつて行われていた。このことは、先学による「五月一日經」や「景雲

「一切経」の研究によって実態の解明が行われている⁽⁶⁾。また奈良末以前に書写された一切経は現存しているものだけでも二六蔵もの存在が確認できることなどから考えて、一切経の写経事業の最盛期といっても良いのではないだろうか。

しかし、これらの一連の写経に関しては、正史である『続日本紀』には全く触れられておらず、加えて『続日本紀』に一切経写経事業に関連する記事はほとんど存在しない。実際、一切経をキーワードに検出できるのは二例のみで、E天平宝字七年(七六三)五月戊申(六日)条にある鑑真の卒伝の中に、鑑真が来日後に勅によって「一切経論」の校正を行ったという記事がみえる。また、F神護景雲元年(七六七)八月丙午(廿九日)条に記される任官記事中に若江王と秦忌寸智麻呂が「一切経次官」に任じられたことが記されるのみである。

なお、一切経という表記はないが、文武天皇四年(七〇〇)三月己未(十日)条の道照の卒伝に「此院多有_二經論_一。書迹楷好。並不_二錯誤_一。皆和上之所_二將來者也_一」とある経論も禪院寺に所蔵されていた一切経を指していると思われる。さらに天平十八年(七四六)六月己亥(十八日)条に掲載されている玄昉の卒伝で「賁_二經論五千餘卷及諸佛像_一來」とある経論五千余卷もその将来の事実は別にして一切経を示しているが、これらを見る限り、『続日本紀』に掲載されている一切経関係の記事は、

当時の写経事業の隆盛に比して甚だ物足りないものであるといえよう。

2 『日本後紀』

『日本後紀』については、散逸している部分が多く、現行の『日本後紀』においては唯一といえる記事としてはG延暦二十四年(八〇五)十月庚申(廿五日)条が挙げられる。

庚申。(中略)奉_二為崇道天皇_一寫_二一切経_一。其書生隨_レ功叙位及得度。

これは、崇道天皇すなわち早良親王のために一切経の書写が行われ、その一切経を書写した者に対して、それぞれの功績に応じて叙位が与えられたり、得度が許可されるという内容が記されている。

これ以外に、『日本後紀』の逸文と考えられるものが三例あり、年代別に列記すると、

H『類聚国史』卷百八十「仏道 諸寺」天長元年(八二四)九月壬申(廿七日)条

淳和天皇天長元年九月壬申。以_二高雄寺_一為_二定額_一。并定_二得度経業等_一。正五位下行河内守和氣朝臣眞綱。從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言。臣聞。父構子終。謂_二之大孝_一。營_レ公猷_レ可。惟忠惟孝。不_レ可_レ不_レ順者也。昔景雲年中。僧

道鏡。以_二佞邪之資_一。登_二玄扈之上_一。辱_二僧_一法王之號。遂懷_二窺覲之心_一。偏_二邪幣御群神_一。行_二權譎御佞黨_一。爰八幡大神。痛_二天嗣之傾弱_一。憂_二狼奴之將興_一。神兵失_レ鋒。鬼戰連_レ年。彼衆我寡。邪強正弱。大神歎_二自威之難當_一。仰_二佛力之奇護_一。乃入_二御夢_一。請_二使者_一。有_レ勅。追_二引臣等故考從三位民部卿清麻呂_一。面宣_二御夢之事_一。仍以_二天位讓_一道鏡之事。令_レ言_二大神_一。清麻呂奉_二詔旨_一。向_二宇佐神宮_一。于_レ時大神託宣。夫神有_二大少_一。好惡不_レ同。善神惡_二淫祀_一。貪神受_二邪幣_一。我爲_二紹隆皇緒_一。扶_二濟國家_一。寫_二造一切經及佛_一。諷_二誦最勝王經万卷_一。建_二一伽藍_一。除_二凶逆於一旦_一。固_二社禊於万代_一。汝承_二此言_一。莫_レ有_二違失_一。清麻呂對_二大神_一誓云。國家平定之後必奏_二後帝_一。奉_レ果_二神願_一。粉骨殞命。不_レ錯_二神言_一。還奏_二此言_一。遭_二時不遇_一。身降_二刑獄_一。遂配_二荒隅_一。幸蒙_二神力_一。再入_二帝都_一。後田原天皇。寶龜十一年。數奏_二此事_一。天皇感嘆。親製_二詔書_一。未_レ行之間。遇_二讓位之事_一。天應二年又奏_二之_一。柏原先帝。即以_二前詔_一。普告_二天下_一。至_二延曆年中_一。私建_二伽藍_一。名曰_二神願寺_一。天皇追嘉_二先功_一。以_二神願寺_一爲_二定額_一。今此寺地勢污穢。不_レ宜_二壇場_一。伏望相_二替高雄寺_一。以爲_二定額_一。名曰_二神護國祚真言寺_一。佛像一依_二大悲胎藏及金剛界等_一。簡_二解_一眞言_二僧_一七人_上。永爲_二國家_一。修_二行三密法門_一。其僧有_レ闕。擇_二有道行_一僧_上補_レ之。又簡_二貞操沙弥_一

七人。令_レ轉_二讀守護國界王經_一。及調和風雨成熟五穀經等。晝夜更代。不_レ斷_二其聲_一。七年之後。預_二得度_一。一則果_二大神之大願_一。二則除_二國家之災難_一者。勅。一代之間。每年聽_レ度一人。又備前國水田廿町。賜_二傳二世_一爲_二功田_一者。入_二彼寺充_一。果_二神願者_一。更延_二二世_一。自餘依_レ請。

I 『日本紀略』天長五年（八二八）二月庚子（十三日）条

庚子。在_二西大寺四王堂_一。故正四位下吉備朝臣由利之奉寫_二一切經_一。充_二法隆寺_一。爲_二彼寺經_一。（以下略）

J 『類聚国史』卷五「神祇五 八幡大神」天長六年（八二九）五月丁酉（十九日）条⁽⁹⁾

天長六年五月丁酉。令_二三僧十口_一。轉_二讀一切經八幡大菩薩宮寺_一。

このうち、HとJはともに八幡宮に関する記事である。Hは高雄寺を定額寺とした時の和氣真綱・仲世との奏言であるが、宇佐八幡が和氣清麻呂に対して下した神託の中に「我爲_二紹隆皇緒_一。扶_二濟國家_一。寫_二造一切經及佛_一。諷_二誦最勝王經万卷_一。建_二一伽藍_一。除_二凶逆於一旦_一。固_二社禊於万代_一」と、一切經の書写と仏像の造立、最勝王經万卷の諷誦、さらには一伽藍を建立することを命じたということが記されている。それに対して、Jでは八幡大菩薩神宮寺すなわち弥勒寺において一切經を転読したという記事である。これは、先に宇佐八幡が和氣清麻呂に命

じた一切経を示しているのかどうか不明であるため、関連する記事か否か明確にはし難いが、ともかく天長六年（八二九）段階で、弥勒寺に一切経が蔵されていたことが判る。

また、Iは西大寺の四王堂に蔵されていた吉備由利発願の一切経について、法隆寺に移し、法隆寺の所蔵とするべきことが記されている。この吉備由利願経については、宝龜十一年（七八〇）に作成された『西大寺資財流記帳』の「経律論疏第四」に「惣一切経律論疏肆部」とある西大寺に所蔵されていた一切経四部の一つとして、

一部、吉備由利命婦（在四王堂）進納

とあるものであることが明らかである。ただし、吉備由利願経については、現在国宝の『大毘盧舍那成仏神変加持経』が西大寺に所蔵されており、果たして一切経の移動が本当に行われたのかどうかは不明といえよう。

3 『続日本後紀』

『続日本後紀』において先に述べた、東国への一切経の写経命令及びそれに関わる一連の記事が見えるが、最初にみえる記事は、東国との関係のない、むしろ『日本後紀』の宇佐八幡に關係する一切経記事が記載されている。

K天長十年（八三三）十月戊申（廿八日）条

戊申。緣_二景雲之年八幡大菩薩所_レ告。至_二天長年中。仰_二大宰府。寫_レ得一切経。至_レ是便安_二置弥勒寺。今更復令_レ寫_二一通。置_二之神護寺。

この記事にみえる「景雲之年八幡大菩薩所告」が、Hにおいて和氣清麻呂に下った託宣の内容であることが指摘できる。そして、そのうちの一切経に関する書写が天長年間（八二四―八三四）に大宰府に命じて開始され、天長十年（八三三）以前に完成し、そこでもう一部一切経を書写して、神護寺に置くべき事が命じられている。すなわち、弥勒寺に安置する一切経が完成したのはJの記事にあるように天長六年（八二九）であったと考えられる。

ところで、この時の一切経書写に関しては、貞觀九年（八六七）の『安祥寺伽藍縁起資財帳』⁽¹⁰⁾に記されている恵運の経歴に、忽然有_レ勅、檢_二校寫一切経於坂東。歷_二四年。強功畢。天長十年奉_レ勅、被_レ拜_二鎮西府觀音寺講師兼筑前國講師。以_レ爲_二九國一嶋之僧統。特_レ勾_二當大藏經之事。恵運固辭不_レ許。強赴_二任所。

とあり、恵運がこの時の一切経書写を勾当したことが明らかとなる。そして、この天長十年（八三三）の恵運の大宰府への派遣はKにある神護寺へ納められることになる一切経の書写事業を完遂するためだったと考えられる。恵運の派遣理由は、その

経略を見る限り天長十年（八三三）以前に「坂東」において一切経書写事業を檢校しており、四年で完成させていたという経歴によるものであったことは明らかである。

次に、東国に關係するものが挙げられる。

し承和元年（八三四）五月乙丑（十五日）条

乙丑。勅。令_下相摸。上総。下総。常陸。上野。下野等國司。勅_レ力寫_二取一切經一部_一。來年九月以前奉進_上。其經本在_二上野國綠野郡綠野寺_一。

M承和二年（八三五）正月庚申（十四日）条

庚申。去年有_レ勅。令_二相摸。上総。下総。常陸。上野。

下野等國。奉_レ寫_二一切經_一。今亦貞元并梵釋寺目錄所_レ載律論疏章紀傳集抄。毎國均分。令_レ加_二寫之_一。

N承和六年（八三九）三月乙酉（四日）条

乙酉。陸奥國百姓三万八百五十八人給_二復三年_一。爲_レ濟_二窮弊_一也。勅。令_下相摸。武藏。上総。下総。常陸。上野。

下野七國。相_二分卷數_一。寫_中進一切經一部_上。其經修飾。通爲_二同色_一（云云）。

これを見ると、まずしで東国六ヶ国に対して、上野國綠野郡にある綠野寺の一切経を底本として、各国で分担して翌年の九月までに一切経を書写することが勅によって命じられている。そして、Mには期限よりも早くに一切経が書写され進上された

が、不足が存在したために『貞元釈教録』と梵釈寺の「目錄」による増補が命じられた。

さらに、Nの最初に東国への書写命令が出された四年後にも再び東国に、武藏国を加えた七ヶ国に対して、一切経の書写がやはり勅によって命じられている。ただし、前回の書写では国毎に「修飾」が異なっていたようで、同一規格で行うことを条件として附加している。

4 『日本文徳天皇実録』

東国に対する一切経の書写命令は、『日本文徳天皇実録』においても記載がみられる。

O仁寿三年（八五三）五月癸巳（四日）条

五月癸巳。詔_二相摸。上総。下総。常陸。上野。陸奥等六國_一。寫_二一切經_一。六國各分_二部帙_一。寫得_上之。

P仁寿三年（八五三）五月癸卯（十四日）条

癸卯。詔_二武藏信濃兩國_一。寫_二一切經各一部_一。

Oでは三度目の書写命令が東国に対して出されているが、下野国と二度目の際に加えられた武藏国が外されて、新たに陸奥国が加えられた六国がその対象となっている。しかし、武藏国は今回の書写命令から完全に外されたわけではなく、その十日後であるPによると、武藏国と信濃国はそれぞれ単独で一切経を

書写することが命じられている。したがって、仁寿三年（八五三）の段階では都合三部の一切経が書写作成されたということになる。

また、同じ『日本文徳天皇実録』ではその三年後に一切経を供養したという記事がある。

Q 齊衡三年（八五六）六月乙酉（一四四）条

乙酉。（中略）是日。請名僧二百六十五人於東西寺及延曆。崇福。梵釋。天王。東大。興福。元興。大安。藥師。西大。法隆。新藥師等十四箇寺。讀所寫一切経各三遍。限三七日訖。每寺差五位一人爲勅使。

これは、名僧二五六人を一四箇寺に集めて供養を行ったという内容であるが、ここにみえる一切経について「所寫一切経」というあるだけで詳細なことは記されていない。ただし、可能性としては先にOとPで書写を命じられた一切経ではないかと考えられる。あくまでも推測の範囲を出ないが、「各三遍」ということを考えると、東国六ヶ国と武蔵国・信濃国に作成が命じられた三部の一切経である可能性があるのではないだろうか。そうすると、この三例の記事は一連の記事ということになろう。

5 『日本三代実録』

六国史の最後である『日本三代実録』では次の五例がある。

R 貞観五年（八六三）四月三日乙未条

三日乙未。先是。伯耆講師傳燈法師位僧賢永奏言。年來五穀不登。百姓窮弊。加之疫病頻發。死亡者衆。賢永奉爲國家。誓願佛力。精誠攸感。頗知靈驗。由是。割留供料。圖書寫一万三千佛并觀世音菩薩像及一切経。貯穀百斛。以資燈炷。請安置國分寺。乃付國司。其穀每年出舉。勿斷燈明。詔許之。

この時に、伯耆国の講師であつた賢永の奏上によつて、一三〇〇〇仏と観世音菩薩像、それに一切経が書写され、諸国の国分寺に安置されることについて許可が下りた記事である。

S 貞観十七年（八七五）正月廿八日壬子条

廿八日壬子。夜。冷然院火。延焼舍五十四宇。秘閣收藏圖籍文書爲灰燼。自餘財寶無有孑遺。唯御願書寫一切経。因緣衆救。僅得令存。

冷然院よりの火災の延焼によつて、收藏されていた図籍文書が灰となったが、御願の一切経のみが無事であつたということが記されている。

T 貞観十七年（八七五）三月廿八日辛亥条

廿八日辛亥。遣傳灯大法師位安宗於大宰弥勒寺。安置一切經三千四百卅二卷大乘經二千二百十四卷。大乘律五十卷小乘律五百卅卷。錄外經百六十七卷。先是。故太政大臣(良房)藤原朝臣欲令今上垂拱而馭百靈。無爲而安万民。奉爲八幡大菩薩。於豊前國寫一切經。令故傳灯大法師位行教檢校其事。繕寫功成。始有首尾。今遣安宗。与府司相共供養安置焉。

この記事は、先にみた宇佐八幡宮の神宮である弥勒寺に、藤原良房が清和天皇のため、万民を安んぜんがために、さらには宇佐八幡大菩薩のために、豊前国に命じて書写させた一切経を奉納したという内容である。『日本三代実録』の中では単独の記事ではあるが、六国史全体を通じていうと、宇佐八幡に関連する記事であるとはいえる。なお、この時は豊前国という大宰府管内の一国において一切経が書写されているが、藤原良房発願の一切経が豊前国において書写されていることについて、当時九州に來襲していた新羅の海賊等に関する外的危機に対処するためという指摘がある⁽¹¹⁾。

U 元慶元年（八七七）十二月十六日壬午条

十六日壬午。以禪院寺爲元興寺別院。禪院寺者。遣唐留學僧道照。還此之後。壬戌年三月。創建本元興寺東南隅。和銅四年八月移建平城京也。道照法師本願記曰。眞

身舍利。一切經論。安置一處。流三通万代。以爲一切衆生所爲之處焉。十六日午。右京人從五位下行山城權介船連副使廬。内藏權少允正七位上津宿祢輔主。主殿允大初位下葛井連直臣等三人。賜姓菅野朝臣。其先。百濟國人也。ここにみえる一切経は、禪院寺が所蔵していた一切経について「道照法師本願記」が引用され、その由来が述べられている。そして、この一切経については、先に『続日本紀』に挙げた文武天皇四年（七〇〇）三月己未（十日）条の道照の卒伝にもみえるもので、道照が唐より將來した由緒正しいものであることが主張されている⁽¹²⁾。

V 元慶五年（八八一）十二月四日戊寅条

十二月乙亥朔。四日戊寅。清和院奉爲先太上天皇。於圓覺寺。設周忌御齋會。供養一切経。太上天皇在祚之日所書寫也。王公朱紫。傾都會集。

円覺寺において清和太上天皇の一周忌に際して御齋会を設け、清和太上天皇が書写した一切経の供養を行った旨の記事である。『日本三代実録』の五例は基本的にそれぞれ単独の記事であるが、この一切経の場合は、あるいはSで火災の際に唯一残った御願の一切経を指している可能性がある。

二、九世紀東国の社会状況

六国史をみる限り、特定の国において一切経の書写を命令しているのは、東国と豊前国に対しての二例しかないことになる。ただし、豊前国の場合は、先にも述べたように書写を命じた理由については、当時の社会情勢の一つである新羅等の外的脅威に対する危機意識があつたことが推測できる。さらに、書写に関与した人物についても、藤原良房が発願し、行教が一切経書写を検校したといったことが記載されている。それに対して、東国の場合は書写命令が下つた理由や、書写に関与した人物については何も記されていない。しかも、一度だけではなく、都合四回も書写が命令されているにも関わらず、その詳細については不明というしかない。

東国に書写を命じた理由について、豊前国の場合の外的脅威に対する危機意識に類するものが東国においてもあつたのかどうかという問題について、先ずは東国の社会情勢について考察を加えてみたい。

東国における一切経の書写命令に関しては、延暦七年（七八八）及び延暦二十年（八〇一）に行われた蝦夷征討の後にもたらされた兵站基地としての政治的工作という指摘が堀池春峰氏⁽¹³⁾によって行われている。確かに、延暦七年（七八八）に紀古佐

美が征東大使に任ぜられ⁽¹⁴⁾、延暦二十年（八〇一）には征夷大將軍である坂上田村麻呂によって戦果が挙げられている⁽¹⁵⁾。しかし、蝦夷経営に関しては桓武天皇の晩年である延暦二十四年（八〇五）十二月七日に藤原緒嗣と菅野真道との間で行われたいわゆる「徳政相論」⁽¹⁶⁾の結果、東北地方における軍事行動の停止が命じられており、弘仁二年（八一二）に文室綿麻呂による征夷が行われて以後は大規模な征夷活動は行われていない。したがって、この時期の東国と蝦夷経営とを結びつけることについては少々無理があるようにも考えられる。

では、この時期、特に弘仁年間（八一〇～八二四）の東国における社会状況はどのようなものであつたのかを考えた場合、この時期までに特筆できることとして、神火の問題が挙げられる⁽¹⁸⁾。

神火について、史料上では天平宝字七年（七六三）が初見となるが、東国においても早く神護景雲年間（七六七～七七〇）⁽¹⁹⁾から史料にみえるようになるが、平安時代に入ってから史料上明らかかなものとしては、弘仁七年（八一六）の上総国夷濩郡で⁽²⁰⁾のものが挙げられ、『類聚国史』巻八十四「政理六 焼亡官」に以下のように詳細が記されている。

七年八月丙辰。公卿奏言。上総國夷濩郡。官物所焼。准額五十七万九百束。正倉六十宇。刑部省斷罪言。檢焼損

使散位正六位上大中臣朝臣井作等申。税長久米部當人。臨失火時。逃亡自殺。推量意況。豈無所犯。忽自引手。可謂當人侵盜官物。謀而放火者。省案律。當人所犯。罪當絞刑。而其身自殺。仍更不論。但新任守小野朝臣眞野。介茨田宿禰文足等。就政日淺。此火之起。不緣不肅。仍案延歷五年八月七日格。不問神灾人火。令當時國司郡司。及税長等。一物已上。依數填備。然則實雖神灾。猶令當時公廨填納。蓋以公廨之設本爲欠負故也。須在任國司郡司及税長等。共填備之者。省斷如此。臣等尋檢法意。外從五位下守大判事物部中原宿禰敏久曰。法家者。如此事類。禁得其身。則自備償。若資財之盡。役身相折。然而不得過五歲。年限既滿。贓物未填。即從原免。斯則公家有損無益。是以。延歷五年格。令下不論神灾人火。以當時公廨填上之。良由欠負之設在後人也。前人去職。不更追咎者。官議商量。事不穩便。所以者。格云。正倉被燒。未必由神。何者。譜代之徒害傍人而相燒。監主之司避納以放火。因茲觀之。格之大體。責歸虛納也。又選用郡司。前人之所行。後司乍到。雜務未分。雖領印鑑。交替未畢。在於此間。會逢失火。前司寄言去職。專避其咎。新任則交替當時。獨以勞填。夫虛納者舊時之怠也。公廨者後司

之料也。有怠則默然免罪責。無怠即每年奪料物。以無怠之料。備有怠之損。事之爲緒。不近物情。今臣等商量。事有大小。政有閑忙。是以分付受領。既立程期。今前司全成雖去職。是收納之當時也。後任眞野雖領印鑑。而見灾之當時也。驗格意。則疑涉虛納。何者。行火自殺。責以填備。則不緣不肅。何者。到任日淺。凡交替之事。限內未畢。則宜言其由。縱令無故過百廿日。全後火起則後任官司更無所禱。而就任以降。十有餘日。歷任不幾。至于獨填。誰甘心前怠後責。伏聞天裁者。奏可。

これについては、その原因は「責帰虚納也」と述べられ、国郡司が虚納を隠蔽するために放火したと認識されている。また弘仁八年（八一七）には常陸国新治郡で発生している。

八年十月癸亥。常陸国新治郡灾。焼不動倉十三宇一。穀九千九百九十石。⁽²¹⁾

さらに、弘仁十年（八一九）二月には相模国国分寺、⁽²²⁾同年八月には遠江・相模・飛驒の三ヶ国における国分寺の火災、⁽²³⁾そして承和二年（八三五）の武蔵国国分寺の七重塔の焼亡に関する記事⁽²⁴⁾がみられる。相模国分寺が二度も焼失していることは注目に値するが、それにもまして、武蔵国の場合は、「以去承和二年爲神火所焼」という記載から神火による焼失ということがわ

かる。ただし、武蔵国分寺の場合は、神火の例に加える事については異論もあるが、史料に「神火」とみえることから、当時の認識として神火であった可能性を認めてもよいのではないだろうか。そして、神火が東国で多く発生したことに對する背景には諸説があるが、何より国分寺自体が火災に遭うということが、東国の社会情勢に関する影響は決して小さくはないと考えられる。

また、神火以外にも九世紀の中頃から後半期になると、東国地域では「俘囚の反乱」が頻発する。律令国家が帰服した蝦夷に對して伝統的に行ってきたのが、内国への強制的な移住、いわゆる移配であつた。⁽²⁷⁾そして、これらの帰服した蝦夷は俘囚の名で呼ばれており、『延喜式』によれば畿内等を除く三五ヶ国に移住させられていた。⁽²⁸⁾移配が行われた背景には、本郷から切り離すことで未服の蝦夷と分断し、内民化を進める政策があつた。移配先ではそれぞれの国より俘囚料が支給され手厚く保護されていたが、俘囚の内民化はなかなか困難であつたらしく、様々な面で優遇策が講じられているにもかかわらずその同化は難しく、しばしば法を犯し、不満を訴えることが絶えなかつた。そして、それが「反乱」という形で集中的に現れてくるのが東国地域の特徴であるといわれている。⁽²⁹⁾

先ず、嘉祥元年（八四八）に上総国で俘囚丸子廻毛らが反乱

を起こしている。⁽³⁰⁾次いで貞観十二年（八七〇）には再び上総国⁽³¹⁾で、貞観十七年（八七五）は下総国・下野国で相繼いで反乱が起こり、元慶七年（八八三）には三度上総国で反乱が起こるなど、特に上総国でも反乱記事が目を引き、東国の不安定な情勢を示しているともいえる。しかし、東国全体で俘囚の反乱が起こつたわけではなく、また承和年間（八三四―八四八）からみると少し時代が下つた段階で発生した事件であるともいえるよう。

さらに、東国においては「群盜」の活動も正史にみえ、早い例としては、『日本文徳天皇実録』仁寿三年（八五三）三月壬子（廿二日）条に記されている丹墀門成の卒伝に、門成が承和十二年（八四五）武蔵権守任命され、翌年には守となつた時の武蔵国の様子として盜賊が横行し、治安が乱れていたことが記されている。⁽³⁶⁾さらに、『日本三代実録』貞観三年（八六一）十一月十六日丙戌条の記事では「以凶猾成党。群盜満山也」とその強勢ぶりが評される。⁽³⁷⁾また貞観十二年（八七〇）十二月二日己卯条には「凡群盜之徒。自此而起」⁽³⁸⁾、元慶七年（八八三）二月九日丙午条では「是俘夷群盜」⁽³⁹⁾とあり、政府は俘囚の反乱と群盜の跋扈とをひとつながりのものとしてとらえていたことが明らかとなる。

以上のように、東国においては神火の問題をはじめ、俘囚の反乱あるいは群盜の跋扈などその政情は決して安定していると

は言い難い。ただし、一切経の書写が最初に命じられた承和元年（八三四）の段階は、丁度それらの問題が発生する端境期であるように思われるが、表面上をみる限りは何ら問題となる事件は発生してはおらず、むしろ安定期であったように考えられる。そうすると、豊前国に書写命令が出されたときのような、緊張した危機意識が生じるような政治情勢ではなかったように思われる。むしろ、安定した状況であったがために東国へ一切経の書写を命じることができたと考えられることができる。

三、緑野寺の一切経

では、一切経の書写命令が東国へ下された理由は何であったのか。合計四度にわたって書写命令が出されているが、それをここで改めて整理すると以下ようになる。

し承和元年（八三四）五月十五日、相模・上総・下総・常陸・上野・下野の六ヶ国。

N承和六年（八三九）三月四日、相模・武蔵・上総・下総・常陸・上野・下野の七ヶ国。

O仁寿三年（八五三）五月四日、相模・上総・下総・常陸・上野・陸奥の六ヶ国。

P仁寿三年（八五三）五月十四日、武蔵・信濃の二ヶ国。

最初は六ヶ国に出されたが、二度目では武蔵国を加えた七ヶ国となり、三度目では武蔵国と下野国を除く替わりに陸奥国が入った六ヶ国となるが、さらに武蔵国と信濃国に対してはそれぞれに一部ずつ一切経の書写を命じている。これらは、それぞれ何らかの理由によるものではあろうが、それぞれの書写命令が関連する一連のものであるのか、全く関連を有しないのかという点に関して、その詳細については不明であるといえないう。ただし、最初の書写命令が下った際に、予定よりも早くその事業が完成しており、それを切っ掛けとして複数回の書写命令が出されるに至った可能性はある。

つまり、承和元年（八三四）五月の時点では、翌年の九月までに進上するべきこと、そして上野国緑野郡緑野寺の一切経を底本として一切経を書写するべき旨が命じられている。しかし、当初の期限よりも早く翌年の正月には進上しているが、底本に問題があったようであり、不足分を『貞元釈教録』と梵釈寺の目録で増補するように再度命じられている。この場合、底本とした緑野寺の一切経については、『開元釈教録』によって作成された一切経であったものと考えられるが、承和元年以前にそれは緑野寺に完備されていたということが判る。

ところで、この一切経の底本を蔵していた緑野寺であるが、鑑真の「持戒第一」の弟子であり、「東国化主」と称された道

忠⁽⁴⁰⁾によつて開かれた寺であると伝えられている。そして、道忠であるがその名は正史には全くみえないものの、天平宝字五年(七六一)に創設された下野薬師寺に戒師として派遣された僧であると考えられる⁽⁴¹⁾。さらに、『叡山大師伝』によると最澄が一切経書写を発願した際に、一切経書写を援助したことが記されており、しかもその時の書写した一切経は「大小経律論二千余卷」という『開元釈教録』の約四割にも達する巻数を書写している⁽⁴²⁾。したがつて、遅くとも最澄が一切経書写を発願した延暦十六年(七九七)の時点で、一切経が道忠の手元にあつたであらうことが想定できる。

また、東国においては道忠の弟子達による活動も活発に行われていた。道忠の弟子として伝えられている者としては、円澄・広智・木徳・鸞鏡・徳念・教興・道応・真静といった僧の名が挙げられるが、このうち円澄・広智・教興の三名が特筆できよう。円澄は後に第二代の天台座主となつた僧であり、また広智の弟子である円仁・安慧も共に第三代と第四代の天台座主となるなど、道忠と最澄との間に密接な関係があつたことが明らかとなる。

次に、広智については、『日本三代実録』の円仁卒伝に円仁誕生した時の奇瑞として紫雲が円仁の生家の上を覆い、その紫雲を広智が見たという話⁽⁴⁴⁾、いわゆる紫雲伝説に登場する。特に

『慈覚大師伝』では広智について「時同郡大慈寺有僧。名曰^レ廣智。是唐僧鑒真和尚第三代弟子也。德行該博。戒定具足。虛^レ己利^レ他。國人號^二廣智菩薩^一」と記されている。これによると、広智は下野国都賀郡の大慈寺の僧であり、鑑真の第三代の弟子で、国人によつて菩薩と称される人物であつたことがわかる⁽⁴⁵⁾。なお、師である道忠以上に広智は最澄の良き協力者として知られ、最澄が東国巡錫に赴いた際に、上野国と下野国に「一級宝塔」の建立を発願したことに關して、実際に最澄の意を受けて事に当たつたのが広智であつたとも推測されている⁽⁴⁶⁾。

そして、教興であるが、『叡山大師伝』には「上野国浄土院一乗仏子教興」とあり、上野国の浄土院の僧であつたことが判り、この浄土院がしにみえる緑野寺のことである。この緑野寺の一切経が先に挙げた最澄の一切経書写を助援した際の一切経である可能性は非常に高い。たとえば、現在高山寺が所蔵している『金剛頂一切如来眞實攝大乘現證大教王經瑜伽經』上・中・下各巻の奥書には⁽⁴⁷⁾

上野國^(緑) 縁野郡 浄院寺

一切經本

掌經佛子教興

掌經佛子

寫經主佛子教興

經師近事法慧

弘仁六年〈歲次乙未〉六月十八日〈卽是平城宮御宇
神野天皇之世也〉

奉爲〈皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基无動六親七世裕德有
餘、近霑自身、遠浴世界〉

〈一切行者法眼无上菩提正因〉

と、弘仁六年（八一五）六月十八日に淨院寺（綠野寺）で書写されたものであることが記されている。また表紙の見返しには墨書があり、

秘密經王三十六卷弘仁六年五月依海阿闍梨之勸進、上毛沙
門教興書進、

右十無盡院中相辛櫃之銘三十六卷之内、金剛頂經三卷現存
云々、

天保元年七月奉修補之、高山沙門慧友護謹記

とあり、この經典は弘仁六年（八一五）五月に空海が勸進を依頼して、教興が書写した経卷であるという。この『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經瑜伽經』は空海自身が唐より持ち帰ったものであり、⁽⁴⁸⁾『統遍照発揮性靈集補闕抄』卷第九に収められている弘仁六年（八一五）四月二日付の「奉勸諸有緣衆應奉写秘密藏文」⁽⁴⁹⁾によつて、空海が「奉勸諸有緣衆」つて写経を依頼した經典の一つであつた。⁽⁵⁰⁾

この時、書写を依頼したであろう人物に関しては、「奉勸諸有緣衆應奉写秘密藏文」に添付して送られてものであろうと考えられる書状が『高野雜筆集』⁽⁵¹⁾に収録されている。そこには六通の書状が収められているが、日付と宛先が確実なものとしては四月五日付の「陸州徳一菩薩」宛のものと、三月二十六日付の「下野廣智禪師」宛の二通がある。ただし、広智宛の日付は四月二日以前であり、時期が異なる可能性があるが、内容から考えて、写経を依頼するものと考えて差し支えはない。また、日付は未詳ながら「甲州藤太守」と「常州藤使君」宛のものがあり、それぞれ藤原真川と藤原福当麻呂を指している。さらに、本文中に「萬徳菩薩」とある書状があり、この万徳については道忠の弟子の一人である「基徳」の誤写の可能性が指摘されている。そして、日付・宛先ともに未詳ながら某阿闍梨宛のものがある。某阿闍梨に書状を託された「康守」は、広智への使者としても派遣されており、あるいは某阿闍梨は教興のことを指すのかもしれない。

しかし、教興の名がみえる綠野寺の一切経で現存する経卷は高山寺所蔵以外では、泉涌寺所蔵の『律撰教授至日慕学処』や聖興寺所蔵の『舍利弗阿毗曇論』が管見に触れるが、⁽⁵²⁾何れも「上野国綠野郡淨院寺一切経本」という奥書があり、本来は綠野寺の一切経として書写されたものであることが推測できる。

つまり、空海の書写依頼に際して、教興は別に緑野寺の一切経に加えるために書写した経巻が、何時の頃か不明であるが緑野寺より流出した可能性があると考えられる。なお、識語にみえる年号では弘仁六年（八一五）の年号以外に、寛弘五年（一〇〇八）の年号があり、遅くとも寛弘五年（一〇〇五）以前に高山寺にもたらされたものであろう。

ところで、緑野寺の一切経については、『安祥寺伽藍縁起資財帳』の記載から、恵運の関与が推測されている。⁽⁵³⁾それは、

「忽然有^レ勅、檢^二校寫一切經於坂東、歷^二四年、強功畢^一」とあることによるが、この文は天長十年（八三三）に觀世音寺講師

・筑前国師として九州に派遣された記事の直前にあり、それ以前に東国において一切経書写事業を檢校したことについては全く異論はない。ただし、緑野寺の一切経が早ければ最澄が一切経書写を發願した延暦十六年（七九七）以前、いくら遅くとも弘仁六年（八一五）以前には作成されていたと考えられることから、恵運の緑野寺一切経の書写への関与はなかったものといえる。つまり、恵運は延暦十七年（七九八）の生まれであり、弘仁六年（八一五）では僅か数え年で十八歳でしかない。しかも、法脈としては恵運は空海の弟子である実恵の弟子であるということを考えると、年代的に恵運が緑野寺の一切経に関与したということ認めすることはできない。しかし、平安時代前期

の東国において、緑野寺以外であっても一切経を所蔵していた寺院の存在は認められ、例えば法隆寺一切経の中で『大菩薩藏經』卷十三は、武藏国国分寺の一切経であつたことがその奥書より明らかとなる。⁽⁵⁵⁾そうすると、今日ではその全てが伝わっていないながらも東国においても一切経の書写ということが行われていた可能性を否定することはできず、恵運が檢校したのもそのような一切経であつたと考えられる。

四、東国への書写命令

東国における一切経の書写については、決して東国が仏教に關しては後進地域であつたとはいえず、むしろ、一切経を作成するための土壌が整っていたと考えられる。そのような状況のなかで東国に対して書写命令が下されたのである。付け加えるならば、道忠をはじめとする道忠教団に属する僧だけではなく、最澄との間で「三一権実論争」を行つた徳一⁽⁵⁶⁾の存在や、日光山の開創者である勝道などが東国では活躍している。さらに、各国に創建された国分寺に加え、官寺として大寺もしくは大寺に準ずる寺院であつたと考えられる下野国薬師寺⁽⁵⁶⁾などが存在したことから明らかとなろう。

では、なぜ東国への書写命令が下されたのかについて考えて

みたい。ただし、LとNではその期間は五年であるが、Lと比べるとOとPに至っては足掛け二十年の時間差が存在する。あるいは、L・NとO・Pでは一切経を書写させた理由が異なっている可能性が推測できる。そのため、Lを中心に考察を進めたい。

最初の命令は承和元年（八三四）五月十四日に出されているが、この時期で注目すべきことのひとつとして挙げられるのが、同年正月に派遣が決まった遣唐使、いわゆる承和の遣唐使であるが、⁽⁵⁷⁾先ず正月に大使藤原常嗣・副使小野篁の任命が行われ、⁽⁵⁸⁾二月には遣唐船造船使が任ぜられている。⁽⁵⁹⁾実際に遣唐使一行が渡海を果たしたのは、承和五年（八三八）であるが、この間に全く渡海が試みられなかったのではなく、三度目の出発で渡海に成功したのであり、承和三年（八三六）と承和四年（八三七）にも渡海は試みられている。すなわち、Lで当初指定されていた一切経の進上期限が承和二年（八三五）九月であることを考えると、第一回目の遣唐使の発遣には時間的な余裕は十分に存在し、承和の遣唐使との関連性は十分に考えられるのではないだろうか。

このことは、承和五年（八三八）の三度目の遣唐使出発に際して、三月二十七日には大宰府諸寺及び国分寺・神宮寺において遣唐使の平穩を祈り、⁽⁶⁰⁾四月五日には遣唐使の出発から帰国ま

での間に諸国に海龍王経を読ませている。⁽⁶¹⁾さらに、五月三日に遣唐使からの要請で、諸国において大般若経を転読させるとともに、改めて遣唐使の帰国まで海龍王経を講じ、大般若経を転読することを命じている。⁽⁶²⁾なお、その後承和六年（八三九）三月一日には、五畿内七道の諸国と十五大寺に対して大般若経及び海龍王経を転読させ、遣唐使の帰国を待つて転読を終わらせるといふ命令が出ている。⁽⁶³⁾このように、遣唐使の派遣に際しては、仏神にその無事を祈るといふことが頻繁に行われており、その一環として東国に対して一切経の書写命令が出された可能性は認められ、LとNに関しては遣唐使の無事を祈願するため⁽⁶⁴⁾に写経が命じられたと考えることに⁽⁶⁵⁾関して矛盾はないように思われる。

しかし、Mにおいて一切経の増補を命じていることについては、若干考えてみる必要があるのではないだろうか。このことは、単に一切経の書写を命じただけではなく、その底本にまで細かい注文を付けていることを考えると、当然何らかの目的を持ったものであったことを示唆しているものといえよう。想像を逞しくすれば、あるいは遣唐使派遣に際して、唐への貢上物として一切経を書写させたのではないだろうか。そして、そのために『開元釈教録』ではなく当時の最新の入蔵録である『貞元釈教録』での増補を命じたのかもしれない。そして、敢えて

東国に書写を命じるというのは、日本国内の蝦夷の地に近い場所、当時の朝廷からみて辺境地においても一切経を書写することが可能であり、それだけ天皇の徳化が行われていることを唐に対してアピールするためのものであったと推測することも可能である。

ただし、OとPでの一切経書写命令については、遣唐使の派遣はないものの、仁寿三年（八五三）七月に円珍が唐人の商船によって唐へと渡っている。⁽⁶⁴⁾しかし、この円珍の渡唐と一切経の書写とは無関係ではなかったかと思われ、承和の段階での書写命令とはその趣を異にする可能性がある。何故なら、Qにおいて一切経を使った法会が行われたことが記されており、この時使用されたのがOとPで書写を命じられた一切経であったと考えられるからである。

この時の一切経の書写の理由について考えてみると、仁寿三年（八五三）には咆瘡が流行していることが『日本文徳天皇実録』から知られるのである。つまり、二月是月条に、

是月。京師及畿外多患「咆瘡」。死者甚衆。天平九年及弘仁五年有「此瘡患」。今年復「不免此疫」而已。

とあるのを初見として、三月二十七日には京師で咆瘡を患う者に対して穀倉院の粳塩を給い、⁽⁶⁵⁾四月十四日に和氣貞臣が、⁽⁶⁶⁾一八日には成康親王が咆瘡によって亡くなっており、四月二十五日

の賀茂祭が咆瘡の流行を理由に停められているなどの記事が挙げられる。⁽⁶⁸⁾したがって、仁寿三年（八五三）における一切経の書写は、疫病の流行に対処するために命じられたものと考えられる。

おわりに

以上、東国に対する一切経の書写命令が出された理由について考えてみた。ただし、本稿で行った考察に関しては、推測に推測を重ねるという部分が決して少なくはないが、その結果、東国は文化面、特に仏教に関しては決して後進地域というわけではなく、むしろ一切経書写が政府の意図した期日より速やかに終えることが可能な地域であったといえる。これはそれだけ東国において仏教・仏教文化が浸透していたということにもなる。ただし、合計四度にわたって東国に対して出された一切経の書写命令について、全てが同じ理由で命令が発せられたという前提で考えるべきかもしれないが、当時の社会情勢等を併せ考えると、当初の命令と、その意味合いが変わっていると考えることも決して不可能ではないと考える。

そして、承和元年（八三四）と承和六年（八三九）に書写命令が出されたことは、その理由としてはあくまでも推測の域を

出るものではないが、承和の遣唐使の無事を祈るという意味合いがあったと考えられるが、それと同時に承和元年に書写された一切経は、遣唐使によって唐に貢上された可能性もあるのではないだろうか。

また、仁寿三年（八五三）に東国諸国及び武蔵国・信濃国に對して出された書写命令については、遣唐使とは関係なく、むしろ当時流行ってきた疫病である疱瘡への対処策として一切経の書写が命じられたものと考えられるのである。

註

- (1) 『日本後紀』の場合、現在散逸している部分が多数存在し、そのため逸文と考えられるものを『類聚国史』や『日本紀略』から検索したものを含んでいる。
- (2) 山下有美「日本古代国家における一切経と対外意識」(『歴史評論』五八六、一九九九年)。
- (3) 堀池春峰「平安時代的一切経書写と法隆寺一切経」(同『南都仏教史の研究』下《諸寺篇》、法蔵館、一九八二年。初出は一九七一年)。
- (4) 堀池前掲註(3)論文。
- (5) 上川通夫「一切経と古代の仏教」(『愛知県立大学文学部論集(日本文化学科編』第四七号、一九八八年)。
- (6) 代表的なものを挙げると、山下有美『正倉院文書と写経の研究』(吉川弘文館、一九九九年)、栄原永遠男『奈良時代の写経と内裏』(塙書房、二〇〇〇年)等が挙げられる。

(7) 宮崎健司氏のご教示による。

(8) 山下有美前掲註(6)書。拙稿「『統日本紀』玄昉伝考」(水野柳太郎編『日本古代の史料と制度』、岩田書院、二〇〇四年)。

(9) 『日本紀略』天長六年(八二九)五月丁酉(十九日)条にも同文が記載されている。

(10) 『安祥寺伽藍縁起資財帳』

少僧都法眼和尚位惠運進具之後、相隨本師東大寺泰基大法師并律師中繼大法師之所、遊於離識無境之道、日夕剋念、欲入至極之祕教、阿闍梨少僧都實惠大法師勸獎云、夫法相大乘、雖教廣理深、而不超三大、得課尤難、不斷種習、證理安在、徒然馳騫、多劫破臆困窮、唯有三乘之外、神道乘者、是三藏之外、持明藏也、一念之便、不經三祇、而九重妄執忽清、一觀之即、不掃磐石、而三重曼荼頗得、所謂即身成佛之祕述者也、惠運依阿闍梨教誡、鑽仰其宗、一紀之念不覺而至、忽然有勅、換校寫一切經於坂東、歷四年、強功畢、天長十年奉勅、被拜鎮西府觀音寺講師兼筑前國講師、以爲九國二嶋之僧統、特勾當大藏經之事、惠運固辭不許、強赴任所、所翹競寸陰而顯得心佛之曼荼、寧樂經半紀而叨爲首領之浮事、儼值大唐商客李處人等化來、惠運就化、要下望乘公歸船入唐、巡禮薦福、興善寺曼荼羅道場、得見青龍義真和尚、請益於祕宗、兼看南岳五臺之聖迹、船主許諾云、東西任命、駢馳隨力、遂則承和九年、即大唐會昌二年(歲次壬戌)、夏五月初五日、脫颶兩箇講師、即出去觀音寺、在太宰府博多津頭、始上船到於肥前國松浦郡遠值嘉島那留浦、而船主李處人等、棄唐來舊船、便採嶋裏楠木、新織作船舶、三箇月日、其功已訖、秋八月廿四日午後上帆、過大洋海入唐、得正東風六箇日夜、

船著「大唐温州樂城縣玉留鎮守府前頭」經「五箇年巡禮求學、承和十四年、即大唐大中二年（歲次丁卯）夏六月廿一日、乘唐人張友信・元靜等之船、從明州望海鎮頭、而上帆、得西風三箇日夜、歸著遠值嘉嶋那留浦、纔入浦口、風即止、舉船歎云、奇快奇快也云々、旋歸本朝、其取來儀軌、經論・佛菩薩祖師像・曼荼羅道具等如目錄、嘉祥元年（歲次戊辰）秋八月、得前攝津國少掾上毛野朝臣松雄之松山一箇峯、謹奉爲太皇太后并四恩、始建安祥寺、仁壽元年（歲次辛未）春三月、太皇太后宮始置七僧、以持念薰修、二年秋閏八月、穎稻一千斤、以爲常燈分、即下官符、付之山城國、齊衡二年（歲次乙亥）言上編官額、三年（歲次丙子）冬十月、施入寺之四邊山、貞觀元年（歲次己卯）夏四月、上啓請四每年度僧、以令恒轉諸宗法輪、殿下允許、遂發勝願、建立堂宇、圖畫尊像、繕寫大乘、始度年分、晝夜無間轉法輪、講安居經、講於唯摩最勝會之立義、聽衆等人又開供、以擬講三藏教法、今爲令後裔識建寺之由緣、錄在帳首云爾、

山五十町、四至（東限大樫大谷 南限山陵 西限堺峯 北限檜尾古寺所）

在山城國宇治郡餘戶郷北方、安祥寺上寺在其裏、建立已後經九箇年、至齊衡三年（歲次丙子）冬十月、太皇太后宮買上件山、施入於安祥寺、

（中略）

上件資財帳勘錄如右、若不請官印、恐後代輕忽、望請官印、以爲公驗、將令後代見之者、慎重傳之不朽、

貞觀九年（歲次丁亥）六月十一日

少僧都法眼和尚位惠運

寺家別當右大史正六位上坂上宿禰斯文

參議正四位下行左大辨兼播磨權守大江朝臣音人

左大史坂上斯文仰云、左大辨大江朝臣音人傳宣、右大臣宣、

安祥寺所申資財帳等捺印之事、須捺官印、而彼寺是太皇

太后宮御願建立也、宜下以職家印令上捺之者、

貞觀十三年八月十七日

少屬御春有世奉

奉行

大夫關

亮兼美濃權介藤原朝臣遠經

大進藤原朝臣眞常

少進藤原範方

少進關

大屬上貞野

少屬清科良行

（11）堀池前掲註（3）論文。

（12）水野柳太郎「道照伝考」（『奈良史学』第一号、一九八三年）。

（13）堀池前掲註（3）論文。

（14）『日本紀略』延暦七年（七八八）七月辛亥（六日）条に「辛亥。以參議紀古佐美爲征東大使」とある。

（15）『日本紀略』延暦二十年（八〇一）九月丙戌（廿七日）条に「丙戌。征夷大將軍坂上宿禰田村麻呂等言。臣聞。云々。討伏夷賊」とある。

（16）徳政相論については、『日本後紀』延暦二十四（八〇五）年

二月壬寅（七日）条に、以下のようにみえる。

壬寅。（中略）是日。中納言近衛大將從三位藤原朝臣内麻呂

侍殿上。有勅。令參議右衛土督從四位下藤原朝臣緒嗣。

與參議左大辨正四位下菅野朝臣眞道相論天下徳政。于時

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

安之。眞道確執異議。不肯聽焉。帝善緒嗣議。即從

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

安之。眞道確執異議。不肯聽焉。帝善緒嗣議。即從

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

安之。眞道確執異議。不肯聽焉。帝善緒嗣議。即從

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

安之。眞道確執異議。不肯聽焉。帝善緒嗣議。即從

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

安之。眞道確執異議。不肯聽焉。帝善緒嗣議。即從

緒嗣議云。方今天下所苦。軍事與造作也。停此兩事。百姓

停廢。有識聞之。莫不感歎。

- (17) 弘仁二年（八一）正月丙午（十一日）には陸奥國に我賀・稗縫・斯波の三郡を設置し、三月甲寅（廿日）に大軍を動員して爾薩体・幣伊二村を征討、十月甲戌（十三日）に平定の報告を行つている（『日本後紀』）。

- (18) 佐伯有清「神火と国分寺の焼失」（同『新撰姓氏録の研究』研究篇、吉川弘文館、一九六三年）。

- (19) 『続日本紀』天平宝字七年（七六三）九月庚子朔条。

九月庚子朔。勅曰。疫死多_レ數。水旱不_レ時。神火屢至。徒損_二官物_一。此者。國郡司等不_レ恭_二於國神_一之咎也。又一旬亢旱。致_二無_レ水苦_一。數日霖雨。抱_二流亡嗟_一。此者國郡司等使_レ民失_レ時。不_レ修_二堤堰_一之過也。自_レ今以後。若有_二此色_一。自_レ目已上宜_二悉遷替_一。不_レ須_二久居勞_一擾百姓。更簡_二良材_一速可_二登用_一。遂使_二拙者歸田_一。賢者在_レ官。各修_二其職_一。務無_二民憂_一。

- (20) 神火との記述はないが『続日本紀』神護景雲三年（七六九）八月己酉（十四日）条に「己酉。下総國狹嶋郡災。燒穀六千四百餘斛」とあることによる。なお、東国における神火の一覧については前掲註（18）の佐伯論文の一覽表参照。

- (21) 『日本紀略』弘仁八年（八一七）十月癸亥（七日）条。

- (22) 『日本紀略』弘仁十年（八一九）二月丁卯（十九日）条および『類聚国史』卷百七十三「災異七 火」に「十年二月丁卯。相摸國金光明寺災。」とある。

- (23) 『類聚国史』卷百七十三「災異七 火」弘仁十年（八一九）八月甲戌（廿九日）条に「八月甲戌。遠江・相模・飛騨三國国分寺災。」とある。

- (24) 『続日本後紀』承和十二年（八四五）三月己巳（廿三日）条に「己巳。武藏國言。國分寺七層塔一基。以_二去承和二年_一爲_二

神火所燒。于_レ今未_二構立_一也。前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云。奉_二爲聖朝_一欲_二造_一彼塔。望請言上。殊蒙_二處分_一者依_二請許_一之。」とあり、承和二年（八三五）に神火によつて焼亡した国分寺の塔を壬生吉志福正が造立せんことを願ひ許可されている。

- (25) 小池栄一「神火についての一考察」（林陸朗・鈴木靖民編『日本古代の国家と祭儀』、雄山閣出版、一九九六年）。

- (26) 佐伯前掲註（18）論文および小池前掲註（25）論文参照。

- (27) 『続日本紀』神龜二年（七二五）閏正月己丑（四日）条に、「閏正月己丑。陸奥國俘囚百卅四人配_二于伊豫國_一。五百七十八人配_二于筑紫_一。十五人配_二于和泉監_一焉。」とあり、俘囚が伊予と筑紫・和泉に配されているが、これが俘囚の移配の初見である。

- (28) 『延喜式』卷二十六「主税上 勘税帳」によれば、俘囚料が記載されているのは、伊勢國・遠江・駿河國・甲斐國・相模國・武藏國・上総國・下総國・常陸國・近江國・美濃國・信濃國・上野國・下野國・越前國・加賀國・越中国・越後國・佐渡國・因幡國・伯耆國・出雲國・播磨國・美作國・備前國・備中国・讃岐國・伊豫國・土佐國・筑前國・筑後國・肥前國・肥後國・豊後國・日向國の三五ヶ国である。

- (29) 中村光一「平安前期における東国地域―国司の動向とその対策を中心として―」（井上辰雄編『古代東国と常陸国風土記』、雄山閣出版、一九九九年）。

- (30) 『続日本後紀』嘉祥元年（八四八）二月庚子（十日）条に、「庚子。上総國馳_二傳_一。奏_二俘囚九子廻毛等叛逆之狀_一。登時勅符_二道發遣_一。一道賜_二上総國_一。一道賜_二相摸上総下総等五國_一。令_二相共討伐_一。」と反乱の勃発とその対処が記されており、その後同二月壬寅（十二日）条で「壬寅。上総國馳_二驛_一。奏_二斬獲反叛

俘囚五十七人」と反乱の終結が上総国から報告されている。

(31) 『日本三代実録』貞観十二年（八七〇）十二月二日己卯条に

「十二月戊寅朔。二日己卯。太政官下符上総國司。令教諭夷種曰。折取夷種。散居中國。縱有盜賊。令其防禦。而今有聞。彼國夷俘等。猶挾野心。未染華風。或行火燒民室。或持兵掠人財物。凡群盜之徒。自此起。今不禁遏。如後害何。宜下勤加捉搦。改其賊心。若有革面。向皇化者。殊加優恤。習其性。背吏教者。追入輿地。莫使僞獮之輩。侵于柔良之民」とある。

(32) 『日本三代実録』貞観十七年（八七五）五月十日辛卯条に

「辛卯十日。從五位下守下総守文室朝臣甘樂麻呂飛驒奏言。俘囚叛乱。故燒官寺。殺略良民。勅符曰。省奏狀。知俘虜怨乱。須下發官兵。以遏鋒銳。又令武藏。上総。常陸。下野等國。各發兵三百人。以爲援助。宜下各合勢迭相追討。早令和解。莫擾農民」とある。

(33) 『日本三代実録』貞観十七年（八七五）七月五日乙酉条に

「乙酉五日。下野國言。討殺賊徒廿七人。歸降俘囚四人。勅。殺服降者。情所不忍者。若非元兇。宜全首領。其勝兵先登。逐虜擒敵者。量加褒賞。使知崇功」とある。

(34) 『日本三代実録』元慶七年（八八三）二月九日丙午条に「九

日丙午。上総介從五位下藤原朝臣正範飛驒奏言。市原郡俘囚卅余人叛乱。盜取官物。數殺略人民。由是發諸郡人兵千人。令其追討。而俘囚燒民廬舍。逃入山中。商量非數千兵者不得征伐者。勅。如奏狀。是俘夷群盜懼罪逃竄者也。況卅餘人僞兒。何足以馳羽檄。宜停給勅契。直下官符。差發人夫。早速追捕」とある。

(35) 『日本文德天皇実録』仁寿三年（八五三）三月壬子（廿二日）

条に以下のようにある。

壬子。（中略）大和守正五位下丹墀真人門成卒。門成者。從五位下内藏助兼右衛士佐豐長之子也。性甚剛直。大同之初。拜巡察彈正。弘仁之初爲少判事。九年爲大和少掾。十一年轉爲大掾。天長三年授從五位下。五年爲丹波介。土民僂戾。不順教化。舊号難治。門成施以猛政。答謂爲先。廳事之前。箠楚如積。數年部内大理。民至今稱之。九年爲治部少輔。十年爲備前介。承和九年叙從五位上。十年爲刑部大輔。十二年爲宮内大輔。後遷爲武藏守。所部曠遠。盜賊充斥。門成下車。未幾。風俗肅清。奸猾斂手。嘉祥三年爲大和守。豪宗右姓。縱放不制。門成施政自如。無所迴避。境内夷晏。民皆戴之。今年叙正五位下。病卒。於官。門成雖無才學。長於從政。所到之處。必樹風聲。相曾貴志「親王任国設置の背景」（井上辰雄編『古代東国と常陸国風土記』、雄山閣出版、一九九九年）。

(37) 『日本三代実録』貞観三年（八六一）十一月十六日丙戌条に

「十六日丙戌。武藏國毎郡置檢非違使一人。以凶猾成黨。群盜滿山也。」と記される。

(38) 『日本三代実録』貞観十二年（八七〇）十二月二日己卯条。

十二月戊寅朔。二日己卯。太政官下符上総國司。令教諭夷種曰。折取夷種。散居中國。縱有盜賊。令其防禦。而今有聞。彼國夷俘等。猶挾野心。未染華風。或行火燒民室。或持兵掠人財物。凡群盜之徒。自此起。今不禁遏。如後害何。宜下勤加捉搦。改其賊心。若有革面。向皇化者。殊加優恤。習其性。背吏教者。追入輿地。莫使僞獮之輩。侵于柔良之民。

(39) 『日本三代実録』元慶七年（八八三）二月九日丙午条。

九日丙午。上総介從五位下藤原朝臣正範飛驒奏言。市原郡俘囚卅余人叛乱。盜取官物。數殺略人民。由是發諸郡人兵千人。令其追討。而俘囚燒民廬舍。逃入山中。商量非數千兵者不得征伐者。勅。如奏狀。是俘夷群盜懼罪逃竄者也。況卅餘人偷兒。何足以馳羽檄。宜停給勅契。直下官符。差發人夫。早速追捕。

- (40) 『叡山大師伝』に「又有東国化主道忠禪師者。是此大唐鑒眞和上持戒第一弟子也」とある。

- (41) 拙稿「下野国薬師寺と如宝・道忠」（根本誠二・サムエル・モース編『奈良仏教と在地社会』、岩田書院、二〇〇四年）。

- (42) 拙稿「最澄と一切経」（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』、法蔵館、二〇〇二年）。

- (43) 『叡山大師伝』には「爰上野国浄土院一乗仏子教興。道応。真静。下野国大慈寺一乗仏子広智。基徳。鸞鏡。徳念等。本是故道忠禪師弟子也」とある。なお、田村晃祐「道忠とその教団」（同『徳一論叢』、国書刊行会、一九八六年。初出は一九六六年）由木義文『東国の仏教』（山喜房仏書林、一九八三年）

「第一章 東国出身の天台座主と道忠教団」等参照。

- (44) 『日本三代実録』貞観六年（八六四）正月十四日辛丑条の円仁の卒伝に「延暦寺座主傳燈大法師位圓仁卒。圓仁。俗姓壬生氏。下野國都賀郡人也。當產時有紫雲。見其家上。家人無見。于時有僧。名曰廣智。國人號廣智菩薩。廣智覩望雲氣。乃知起於檀越壬生氏家。甚以奇之。秘而不言。（以下略）」とある。

- (45) 広智については佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）「第五章慈覚大師の師広智菩薩」に詳しい。

- (46) 田村晃祐前掲註（43）論文。

- (47) 『群馬県史』資料編4 原始古代4（一九八五年）。『金剛頂一切如来眞實攝大乘現證大教王經瑜伽經』

〈巻第一〉

（表紙・朱書）『眞第三箱』

（外題）「金剛頂大教王經上卷」

（表紙見返）「秘密經王三十六卷弘仁六年五月依海阿闍梨之勸進、上毛沙門教興書進、

右十無盡院中相辛櫃之銘三十六卷之内、金剛頂

經三卷現存云々、

天保元年七月奉修補之、高山沙門慧友護謹記」

（奥書）

上野國 縁野郡 浄院寺

一切經本

掌經佛子教興

掌經佛子

寫經主佛子教興

經師近事法慧

弘仁六年〈歲次乙未〉六月十八日〈即是平城宮御宇

神野天皇之世也〉

奉爲

〈皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基无動六親七世裕徳有餘、近洽自身、遠浴他界、〉

〈一切行者法眼无上菩提正因〉

（白書）「寛弘五年三月廿四日於仁和寺南御室點始、同五日點了、

日點了、

□□□闍梨奉受了、叡算之、」（朱書）『沙門叡算

之、』

〈第巻二〉

(表紙・朱書)『真第三箱』

(外題)「金剛頂大教王經中卷」

(表紙見返)「(奥書)の首六行と同文を写しているのて省略」

天保元年七月奉修補之、高山沙門慧友護謹記」

(奥書)

上野國^(巻) 縁野郡 淨院寺

一切經本

掌經佛子教興

掌經佛子

寫經主佛子教興

經師近事法慧

弘仁六年〈歲次乙未〉六月十八日〈即是平城宮御宇

神野天皇之世也〉

奉爲

〈皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基无動六親七世裕德

有餘、近霑自身、遠浴他界、〉

(白書)「同□□□□」

寬弘^(五カ)五年三月廿^(七カ)日點了、求法僧叡算」

(朱書)『寬弘五年三月廿六日於仁和寺之内南御室受學高尾法

照阿闍梨筆、沙門叡算之、』

〈卷第三〉

(表紙・朱書)『真第三箱』

(外題)「金剛頂大教王經下卷」

(表紙見返)「長元八年十一月十六日於田野御房點了、傳授師

僧都御房也

寬弘五年三月廿七日於仁和寺之内南御室點始

高尾法照闍梨奉受々、

(奥書)

天保元年七月奉修補之、高山沙門慧友護謹記」

上野國^(巻) 縁野郡 淨院寺

一切經本

掌經佛子教興

掌經佛子

寫經主佛子教興

經師近事法慧

弘仁六年〈歲次乙未〉六月十八日〈即是平城宮御宇

神野天皇之世也〉

奉爲

〈皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基无動六親七世裕德

有餘、近治自身、遠浴他界、〉

(白書)「寬弘□□」

(朱書)『寬弘五年三月廿七日於仁和寺之内南御室高尾法照

闍梨受學了、沙門叡算之、』

(48) 空海『御請来目錄』

(49) 渡辺照宏・宮坂宥勝校注『三教指帰 性靈集』(日本古典文

学大系71、岩波書店、一九六五年)。

(50) 菅原征子「東国仏教と最澄そして空海」(同『日本古代の民

間宗教』、吉川弘文館、二〇〇三年。初出は一九八四年)。

(51) 以下については『弘法大師空海全集』第七卷(筑摩書房、一

九八四年)の高木神元氏の解説を参考とした。

(52) 前掲註(47)に同じ。

『律攝教授至日慕學處』(泉涌寺蔵)

(奥書)

上野國縁野郡淨院寺^(院カ)一切經本、掌經佛子教興、

弘仁六年六月十八日、寫經佛子教^(興)、經師匠事法慧、奉爲
皇帝皇妃太子諸皇左

右大臣、洪基無動、六親七世、浴德有餘、近霑自身、遠洽池界、^(他)

『舍利弗阿毗曇論』(聖興寺藏)

奥云、上野國綠野郡淨院寺 一切經本

掌經佛子教興 掌經佛子智證 寫經主經師近事淨道 奉爲

皇帝皇妃、洪基無動、六親七世、裕德有餘、近霑自身、

遠洽他界、一切行者法眼 無上菩提正因

(53) 前掲註(10)。

(54) 菅原征子「兩毛地方の仏教と最澄」(同『日本古代の民間宗

教』、吉川弘文館、二〇〇三年。初出は一九八二年)。また堀池

前掲註(3) 論文においても、一応疑問を呈されながらも、そ

の可能性を指摘しておられる。

(55) 堀池前掲註(3) 論文、及び同「仏典と写經」(同『南都仏

教史の研究』遺芳篇、法藏館、二〇〇四年。初出は一九八三

年)。

(56) 拙稿前掲註(8) 論文。

(57) 承和の遣唐使については佐伯有清『最後の遣唐使』(講談社

現代新書、講談社、一九七八年)に詳しい。

(58) 『続日本後紀』承和元年(八三四)正月庚午(十九日)条。

(59) 『続日本後紀』承和元年(八三四)二月癸未(二日)条。

(60) 『続日本後紀』承和五年(八三八)三月甲申(廿七日)条。

(61) 『続日本後紀』承和五年(八三八)四月壬辰(五日)条。

(62) 『続日本後紀』承和五年(八三八)五月己未(三日)条。

(63) 『続日本後紀』承和六年(八三九)三月壬午朔条。

(64) 『天台宗延暦寺座主円珍伝』(佐伯有清『智証大師伝の研究』

「吉川弘文館、一九八九年」第六章 円珍伝の校訂と註解」

による)。

(65) 『日本文徳天皇実録』仁寿三年(八五三)三月丁巳(廿七日)

条。

(66) 『日本文徳天皇実録』仁寿三年(八五三)四月甲戌(十四日)

条。

(67) 『日本文徳天皇実録』仁寿三年(八五三)四月乙酉(廿五日)

条。

(68) その他の炮瘡に関する記事としては、四月丙戌(廿六日)条

・五月辛亥(廿二日)条・五月戊午(廿九日)条・九月辛丑

(十四日)条がみえる。